
Black Or White.

春 ` ` 季

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Black Or White .

【コード】

N5038G

【作者名】

春、季

【あらすじ】

どこかに存在する魔法学園。その優等生が巻き込まれたのは…

国家機密。

第一幕・プロローグ

昔はもっと人間らしい考えを持っていたような気がする。

今となってはその記憶さえも曖昧だけれど。

第二幕…この日常。

カツ…カツ…

革靴の音が虚しく廊下に響く。

カツ…カツ……カツン。

自分一人しかいないはずの廊下にふと他の気配を感じて足を止める。

周りをゆっくりと見渡して誰かいないか確認する。

…姿は見えないが、気配は、ある。

暫く周りを窺っていたがこのまま足を止めている訳にもいかないの
で再び足を踏み出す。

もちろん警戒は解かぬまま。

ザッ

近くで何かが動く音。

「神城！よくも俺の…俺の恋人を！」

音とほぼ同時に男の叫び声が響く。

「恋人…？誰のことか分からないのだけど？」

「ふざけんな。お前があいつを殺したんだろ！恵美…香川恵美を！」

忘れたとは言わせねえ。」

「ごめんなさいね。記憶にないわ。」

「嘘つくんじゃないか。」

嘘じゃないもんね。

本当に覚えてないんだから。

本当に覚えてないんだから。

そりゃ…殺したかもしれないけど。

校則で殺人は許可されてるし、犯罪ではないのよね。

「わざわざ殺されに来る奴のことなんて覚えてられる程、私の脳は大きくないのよ。」

「ついに本性出しやがったな！」

別に隠してるつもりはないんだけど…。

「恵美の仇は俺が取る！」

漫画の読みすぎだろ。

漫画読んでる暇あったら勉強しなさい。

しかもこの学園で幸せな生活送るなんて…

ドサ…

男の体が廊下に横たわる。

「不可能でしょ。」

まったく…どいつもこいつも…いい加減にして欲しいんだけど。

校則もう一度読み直して欲しい。切実にそう思います。

第三幕：神城学園高等部の三大原則及び校則

神城学園高等部。

三大原則。

壹、自立

生徒は何事に対しても他からの助力を得ずに一人でやりとげるよう。

貳、浮薄

他人のことには関心を持たず自分のことを第一に考えて行動するよう。

参、忍耐

些細なことで怒りを表面に出さぬように。限界まで忍耐の精神を忘れぬように。

神城学園高等部、校則

1、校則を破った場合ペナルティがつく。一回校則を破るにつきペ

ナルティが1つつけられ、3溜まったら退学とする。

2、学園内での殺人は犯罪とせず、教育の一部とする。

しかし、何の理由もなしに殺人を犯すのはペナルティを1つける。

3、立ち入り禁止区域に入り負傷した場合はペナルティが1つつけられる。負傷しないで無事に出てくることが出来れば、ペナルティはつけられない。

4、学校内で放し飼いにされている魔法生物に攻撃しないこと。

攻撃により刺激された魔法生物が何らかの影響を及ぼしたの場合、ペナルティは二つつく。

何の影響もなかった場合にはペナルティは一つ。

正当防衛の場合はペナルティはつかないが、自分以外の人物の証言、またはその現場の映像がなければ正当防衛だとは認められない。

5、魔法レベルが自分より高い者に対して失礼な態度はとってはならない。

学年は関係なく魔法レベルが高い程得ることのできる権利も増える。

6、服装は制服を身につければ他はなんでもいい。

しかし魔法レベルを示すブレスレットは必ず着用すること。

7、神城学園高等部の生徒は三年間、敷地から出てはいけない。
出た場合ペナルティが1つつけられる。
どうしても出ないといけない時は学園長、生徒会長の許可を貰うこ
と。

8、実技テストである程度のレベルに届かなかった場合、追試でそ
のレベルを上回る高得点をだすこと。
出来なければ即刻退学とする。

以上のことを常に頭に入れ、本校の生徒という自覚を持ち生活する
こと。

第四幕：一人の空間

ガチャ。

部屋に入りドアの鍵をしめる。

「ふう…」

やっと今日初めてのため息をつくことができた。

学校ではいつも気を張っていなければならなかったため息なんかついていけない。

そのまま倒れ込むようにしてベッドに座る。

疲れた。

いつも感じることだけど、今日は何故かいつも以上に疲れを感じる。

頭の中で今日あったことを思い出して疲れの原因を探してみる。

しかし、特に思い当たらない。

あるとしたら放課後の恋人の復讐に私を殺しに来た男のことだが、ああいうのは毎日のことだ。

もう、慣れてしまった。

最初こそ驚いたものだが、慣れてしまえば不思議なことに人を殺すこさえも快感にすら感じてくる。

何かと理由をつけて人を殺していた時期もあったが、もうそんなことはしない。

だって向こう側から殺されに来てくれるようになったから。

復讐という名の自殺行為で。

私に戦いを挑めば負けること位分かっているのに。

学園トップの戦闘力と頭脳を誇るこの私に。

普段ならそんな愚かな行為はしないだろう。

ただ命を落とすだけだと分かっているから。

しかし、愛する人を失ったとなると頭が混乱して正常な判断ができなくなるのだろうか。

私に殺された人の復讐に来て殺された人の復讐に来てまた殺された人の復讐に来て殺されて…

ずっとこの繰り返し返し。

気づけばいいのに。

復讐は無駄な犠牲者を出すだけの愚かな行為だと。

私が復讐に殺されればこの悲しい連鎖も終わるのだろうか。

私のことが大切な人なんて一人もいないのだから。

自虐的なその言葉に気付いてそっと目を閉じた。

そしてもう一度疲れの原因について考えたけれど結局分からなかった。

考えることに疲れて風呂は朝入ることを決心して眠りについた。

第五幕：運命の歯車は狂い出す

朝：

いつも通りに目が覚めて、シャワーを浴びて朝食を食べて。

一晩寝ても昨日の疲れは取れなかったけど、特に気にもせず学園へ登校した。

そう、全てがいつも通りで何も変わらない。

りりいん…

どこにでもありそうなあたりな鐘の音で朝のHRが始まる。

前に立つ担任の教師はあまり重要でないことをベラベラと喋っている。

特に興味を持てる内容でなかったのですと下を向いていたのだが。

「今日は皆さんにニュースがあります。」

先程の話から次の話題へ変わったようだ。
ニユースが何か少し気になったので顔を前に向ける。

一拍おいて担任は言った。

「今日からこのクラスに転校生が来ます。」

ざわめきがクラスに広がる。

ガラッ…

扉が開く。

入って来たのは普通の男子。
顔は整ってはいるが、どこにでもいそうな普通の男子。

クラスメイトの反応も普通。
物珍しげな顔で転校生を見ている。

私もその一人になってじっと見ていると、ふと目があった。

私は笑う。顔に張り付けたような愛想笑いで。

相手も笑う。不気味な程の満面の笑みで。

その笑顔を見た瞬間何かを思い出す。

体が、脳が発する。

赤色に点滅する危険信号。

コイツハキケンダ。チカヅクナ、チカヅイテ、ムカシノヨウナミジ
メナオモイヲスルノハ、オマエダ。

昨日から感じていた疲れはコレの予兆だったのか！

第六幕：失ったモノ

思い出した。

思い出したんだ。

何で私には家族がないのか。

何で私はこの学園にいるのか。

何で私は…この学園に入学する以前の記憶がないのかも。

全部、全部。

思い出したことに對する喜びを感じると同時に後悔も感じた。

思い出してしまった。

思い出さない方が幸せだったのに。

体が震え出す。

コワイ、コワイ。

恐いの。恐いよ！

昔もこんな状態になった。

でも今とは違った。

あの時は支えてくれる家族がいたし、友達もいた。

なのに今は…？

愛して、愛してくれた家族はみんな死んでしまった。

私のせいで。

ずっと一緒だと言って隣で笑ってくれた友達も今は何処かの遠い病院のベッドの上で眠っている。

もしかしたらもう死んでしまったかもしれない。

だってあれから3年経つものだから。

これも私のせいで。

みんな、みんな私のせいで消えてしまった。

残ったのは一番罪深く、卑しい私だけ。

「誰も、いな…い。」

言葉にすると現実が見えてきて涙が溢れた。

朝のHR中だということも忘れて泣いた。

声はあげないで静かに、ただひたすら涙を溢した。

りりん…

HRが終わった。

私が泣いてるのに誰も気づかぬまま。
それとも誰か気付いただろうか。

どっちにしろ誰も話しかけて来なかったのは有り難かった。

下手な慰めの言葉なんていらないから。

ザワザワと騒がしい廊下に出る。本当はいつものように教室でゆっくり過ごしたかったがあの転校生がいる所へは極力行きたくない。

第七幕…あの日の悪夢

一人で落ち着いて考え事をしたかったので人気の少ない中庭に行っ
た。

一人になったことを確認して近くのベンチに腰を下ろし、目を閉じ
る。

泣いたせいか、頭が痛い。

一校時はサボることを決めて瞳を閉じた。

暗い…

あの日の光景が頭に浮かぶ。

これは、夢、なのか。

「何でもするから…だから殺さないで！死にたくない…まだ生きて
いたいのに！」

「命乞いはみっともないよ、冬ちゃん。」

そう言った途端男の手のひらにあった光が輝きを増す。

カッ…!!

「っ…」

私は死を覚悟した。

「冬梨！危ないっ…」

その母の声が聞こえた途端目の前が赤く染まる。

「…?」

何が起こったか分からない。

目の前にはさっきまで動いていただろう肉の塊。

何、これは何？

お母さんは？

さっきまで近くに、私を励ましてくれたお母さんはどこへ行ったの？

「これ…何？お母さんは？ねえ、お母さんはどこに行ったの？」

目の前で無表情で立っている男に尋ねた。

「…ああ、これ？これはね、冬ちゃんのお母さんだよ。分からないの？」

「これ、が、お母さん？だって動かないよ。真っ赤だよ。小さすぎるよ…」

「何言ってるの。死んだ人は動かないし、ケガをすれば血は出るし、手足が千切れれば小さくもなるよ。」

「お母さん、死んだの？…何で。何で死んだの？」

「それは冬ちゃんを庇ったからでしょ。まあ、美しき親子愛だねえ。」

「

「私を、庇った？私が死にたくないと思ったから。私が生きていた
いと望んだから。私が…」

口を歪ませて男は笑った。

「そう、全部冬ちゃんのせい。」

また、いつか迎えに来るよ。

全てが消えて暗くなる。

「ねえ…」

あの男の声が聞こえる。
まだ夢は終わっていないのだろうか。

「起きなよ、迎えに来たんだよ。ねえ、冬ちゃん。」

第八幕：歪んだ愛

「っ…！」

ひどく懐かしい、でも大嫌いな男の声で目覚める。

目覚めは、最悪。

「何しに来たんですか。あなたみたいな組織の幹部が私みたいな雑魚、しかも昔組織を抜けた人間に用があるわけない。」

「何言ってるの。昔約束したじゃない。また、迎えに来るよ、って。」

先程見たばかりの夢の内容を思い出す。

確かにそんなことを言っていた。

でも…

「あんなの約束じゃない。私はあなたの言葉に頷いていないもの。」

きよとん。

まさにそんな擬音の似合うような顔を男はする。

暫しの沈黙。

「あはっ。ははははっ！冬ちゃん、口だけはよく回るようになったんだね。心はあの時のままだけだ。」

そんな訳ない。あの時より私はずっと強くなった。心も、体も。

「自覚してないの？馬鹿だねー。ま、そんなところが俺は好きなんだけどね。」

愛してるよ、そう言って目の前の男は笑った。

「さ、余興はここまでにしてさっさと一緒に帰ろっ？」

男が発したその言葉に私は驚いた。
てっきり殺されるものかと思っていたから。

「殺さ、ないの、？」

一度目は蚊の鳴くような小さな声で。

「ん？」

「殺さないの？私を。」

二回目はもう少し大きな声で。

また男は笑って言った。

よく笑う男だ。

殺さないよ、と。

「本当はね殺せて命令されてたんだけど、俺が上司を説得したの。」

「あ

「冬ちゃんは俺が家に一生閉じ込めときます、って。」

ありがとう、と感謝の言葉を述べようとしたが男の信じられない言葉に遮られた。

男は続ける。

「手首足首を鎖で繋いで首輪をしてね、ずっとベッドから離さないの。あ、でも安心してね。」ご飯もあげるし、服も可愛いもの買ってあげる。欲しいものがあつたら何でも与えるし。家の中だけだつたら動いてもいいよ。流石にベッドだけっていうのは可哀想だしね。」

自分の耳を疑った。

何を言っているの？この男は。

第九幕：選んだのは、私。

「そんなの犯罪よ。国が許すはずないわ…」

監禁は犯罪だと法律でも決まっている。

「あ、もしかして俺がこれからする行為を監禁だと思ってる?」

勿論だ。それ以外に何がある。

「監禁以外のなにものでもないでしょ。」

「違うよー。そこに愛があれば監禁にはならないの。俺は冬ちゃんを愛しているし、冬ちゃんは俺を愛しているでしょ?」

意味が分からない。

私のどの行動がこの男にそんな勘違いをさせたというのだ。

「私はあなたを愛していないわ。」

「俺は冬ちゃんを愛しているよ。」

「いい加減にして！私はあなたを愛してはいないの。むしろ憎んで
いるくらい。」

目の前の男の顔から笑顔が消えた。

冬ちゃんが俺を愛していないこと位知ってたよ。

その声が聞こえたとき私の胸にはナイフが刺さっていた。

「な、に…?」

死んでない。

胸に、心臓がある左胸を刺されたら即死のはずなのに。

「冬ちゃんはさ、俺の愛が偽物だと思っ?」

頭が混乱して言葉がでない。

偽物に決まってるじゃない。

お母さんを殺した男の愛が本物の訳ない。

「分かりやすいね。俺を見るその目が教えてくれる。」

でもね、

「本当に愛してるんだよ。」

男の声が頭に響く。

愛してるんだよ。

あいしてるんだよ。

アイシテルンダヨ。

不思議と苦しくは、ない。

「他の奴に冬ちゃんを殺される位だったら俺が冬ちゃんを殺す。だからね、選ばせてあげる。」

「俺と一緒に来るか、それともここで死ぬか。どっちがいい？」

最悪の選択。

この男と一緒に行くのは嫌。

死にたくもない。

あの時、母の亡骸に誓った。

自分の命を無駄にしてまで私を助けた家族に、友人。

その思いを無駄にしてしまうのはまたしても私の我が儘。

「さあ、どうする？冬ちゃん。」

どうしようか。

この男に着いて行ったら私は自由を失う。

私にはもうこの命と自由しか残っていない。

自由を捨てるか、自由を持ったまま命を捨てるか。

「行くわ、一緒に。」

安心してね。お母さん、みんな。

助けて貰ったこの命、無駄にはしないわ。

「本当に！？これからはずっと一緒だね！」

途端この男の後ろに激しく揺れる犬の尻尾が見えた、ような気がした。

「よろしくね、紫苑。」

第十幕：君の名は

覚えていながらもあえて呼ばなかった男の名を、呼んだ。

「冬ちゃん、俺の名前覚えてたの？」

「まあ、一応はね。」

何度も忘れようとしたけど忘れられなかった、その名前。

母を殺した男の名。

許せるだろうか。

「それよりも、」

これ、と言って胸に刺さったままになっているナイフを指差した。

「ああ！」「めんね。でも、痛くないでしょ？」

確かに痛みはない。

あつたのは刺された時の衝撃だけ。

「魔法で麻酔効果がある科学物質を冬ちゃんの体内に入れたから。これから治療もしてあげるし。」

やっぱり魔法か…

でも、

「治療魔法くらい自分で使えるわ。」

「いーの！俺がしたいんだから。」

紫苑が手をかざすと一気に空いていた穴が塞がる。

「…ありがとう。」

「うん。どういたしまして。」

りりん…

一校時が終わったようだ。

「人が来ない内に行こうか。」

「そうね。」

そう言っただけで周りを見渡す。
この学園を見るのも最後。

もしかしたら外で太陽の光を浴びることさえ最後かもしれない。

「友達とか、先生とかにお別れはいいの？」

「未練は何も、ただ」

ただ好きな魔法が勉強出来なくなることだけが、悔しい。

「魔法は教えてあげるよ。俺が直々に。」

何で分かったの。

「何でって？俺は読心術も使えるからさ。」

「…あんま使わないでよ。」

心の中を覗かれるのは気持ちのいいもんじゃない。
人に知られたくない秘密を持っている人なら尚更。

「分かってるよー。あんま使わない。約束ね。」

そう言って小指を差し出してくる。

子供じみたその行為に呆れながらも自分の小指を絡ませる。

「約束よ。」

「冬ちゃんが一生傍にいても約束。」

「紫苑が一生私を愛し続けることも約束よ。」

紫苑が驚いたような顔をした後、笑う。

「俺は冬ちゃんを愛し続けるよ。」

どんなことがあっても。

「私も一生、紫苑の傍にいるわ。」

どんなことがあっても。

紫苑が言うその愛を信じて吉と出るか、凶とでるか。

第十一幕：追憶

魔法で紫苑の住んでいる所、言い換えれば紫苑が所属している組織の寮に瞬間移動した。

「懐かしいわねえ。」

「冬ちゃんが組織を抜けてから何一つ変わっていないからね。」

「三年しか経ってないもの。」

「三年しかじゃないよ、三年も経ったんだよ。」

周りを見渡す。

本当にあの頃から何も変わってないのね。

昔を思い出す。

紫苑と私と仲の良かったあの人たち。

仕事がないときは大体の時間を一緒に過ごした。

仕事の時間が多すぎて一緒にいる時間は少なかったが。

「過去を振り返るのはこれくらいにしてー、まずはマスターに会いに行かないと。」

「私あの人苦手なのよね…。」

「マスターは冬ちゃんのこと好いてたみたいだったけど。」

紫苑の言葉が過去形なのは私が組織で禁忌とされる行為を犯したか
5。

「なんで、」

あんなことしたの、

と続けるはずだったであろう紫苑の口を私の手が塞いだ。

「言わない、言えないわ。今はね、まだ。」

「冬ちゃんは俺を信用してないの？」

「…。」

だって紫苑は、お母さんを

「紫苑はお母さんを殺した…。」

「あれはっ…。」

紫苑は、はっとしたようにその先の言葉を飲み込んだ。

やっぱり私が知らないことがあったのだ、あの事件には。

組織にいた頃の私の階級は紫苑が属する四大幹部の下につくただの構成員。

決して低い階級ではなかったけれど四大幹部よりは入ってくる情報は少なかった。

それが原因で、

私がもう少し強かったならば。

「でも、」

何か事情があつてお母さんを殺したならば、紫苑を許せる。

だって元々紫苑は嫌いじゃなかった。

「別にいいわよ。過去のことあまり気にしない主義だから。」

いつまでも引きずっているのはカッコ悪いでしょ。

「…冬ちゃんが俺を信用して全てを話してくれたら、俺もあの事件のことを全て話してあげる。」

「いつになるかは分からないけど。」

「近い内にその時が来ることを願っているよ。」

そう遠くはない内に実現されるだろう。

昔は一緒にいたせいか、もう既に少し感化されている。

「や、面倒なことはわっさと終わらそうか。」

「そうね。…少し緊張してきたわ。」

「冬ちゃん緊張とかするんだ!？」

「別に驚く事もないでしょ。」マスターの部屋まで紫苑と他愛もない話をして歩いた。

普通に楽しいと感じる。

神城学園にいたころはなかったこの感覚。

でも、またこの幸せを失ってしまうのではないか。

昔は当たり前だと思っていたこの時間を失ってしまった。

気づいたときには紫苑も他のみんなも、もうずっと遠くにいて。

でも、同じ過ちは二度と繰り返さない。

「あ、着いた。」

「この扉も相変わらずねえ。」

冬梨の視線の先にあるのは金細工などが施された豪華な扉。

「マスターの趣味なんだっけ。成金趣味よねー。」

「…冬ちゃん、それ言ったら殺されるよ。」

本気とも冗談ともつかないような紫苑の口調に笑ってしまった。

コンコン…

無駄に装飾された扉をノックする。

「びびぞ。」

中から聞こえてきたのは低く重い声。

「失礼します。」

そう言って入った紫苑の後に続く。

「紫苑は部屋から出る。」

「冬ちゃ、冬梨を、この部屋であなたと二人きりにしろと言っんですか。」

挨拶もなしにいきなりマスターは紫苑にそう言った。

「これは命令だ。従え、紫苑。」

「っ…はい。」

紫苑は不安そうな目を私に向けてくる。

紫苑に軽く笑いかけてマスターの方を見る。

「失礼しました、扉の外で待機しています。」

紫苑が退出する。

「さて、邪魔者もいなくなったことだしその椅子に掛ける、冬梨。」

言われるがままに椅子に座る。

「冬梨、お前は三年前禁忌を犯した。」

禁忌を犯した、その事実は確かだ。

「それだけならまだしもこの組織を逃げ出した。」

それもまた、確かな事実である。

「その罪は冬梨、極刑に値する。」

この組織の極刑とは、死。

「その刑をマスターが私に下すのであれば、私は逆らいもせず
その刑を受けましょう。」

マスターへの忠誠はまだ確かに。

あの時は記憶がなくなって裏切りなんて行為をしてしまったけど。

「…いや、殺さないよ。最初から組織に戻ってくれば殺すつもりは
なかった。」

は…？

「何ておっしゃいましたか、もう一度お願いします。」

「組織に戻ってくれば殺すつもりはない、と。」

「でも紫苑は上司を説得した、と言っていましたか。」

「ああ……」

それはねえ

「冗談で冬梨を殺してきて、と言ったら必死に反論してきたからつい面白くて。」

「冗談だ、と言うタイミングを失った訳ですね。」

「まあ、そういうことになる。でもまあ、しかし……」

「しかし？」

「組織に戻って来なかったら殺せ、とも命令したかも。」

笑って言った目の前の人に呆れる。

こんなんでも一応は組織のマスター、トップだ。

「紫苑！。入って来ていいぞ。」

「…。」

無言で入ってきた紫苑。

「仮にもマスターに対して失礼します、も無しか紫苑。…お前話盗み聞きしてただろ。」

「！」

盗み聞き…何か軽蔑するわ。

「だってえ…気になったし。認めるからさ冬ちゃん、そんな冷たい視線を向けないでよー。」

「それより紫苑、話聞いてたんなら分かるよな？冬梨は復帰だ。あの事件は四大幹部しか知らないからな。長期の出張から戻って来たことにしろ。」

「…復帰ですか!？」

反応したのは紫苑よりも私が先だった。

「何だ冬梨、復帰が不満か？」

「いえ…」

むしろ嬉しく感じる。

紫苑の家にずっといるより外で仕事していた方が気が紛れるし、他の人と交流もできるから楽しいだろう。

「ええーっ!？」

「何なんだ紫苑！煩いぞ。」

「冬ちゃんは俺の家に一生閉じ込めとくんだよ！俺の物だしー！」

「何言ってるんだ？何のために組織に冬梨を呼び戻したと思ってんだ。組織は今、人手不足なんだよ。しかも冬ちゃんってなんだ！」

「俺のためでしょ？人手不足じゃないもん。たくさんいるじゃん。殺しても殺しても困らないくらいたくさんいるじゃん！冬ちゃんは冬ちゃんなの。呼び方は自由だろ！？」

「マスターには逆らえないでしょ？紫苑。」

「そつだ紫苑。俺はマスターだぞ、マスターに何て口聞いてんだ！」

「マスターも調子にのらないで下さいよ。」

「冬梨…。」

「…またあとで話聞きに来るよ。冬梨行こうか。」

「いや、また後で聞きに来るの面倒だから今全部説明聞いていきます。」

扉の方に向かって歩いていった紫苑とは反対の方を向く。

「さあ、説明をお願いします、マスター。」

「あ、ああ。えーと…」

説明された内容は簡単なものだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5038g/>

Black Or White.

2010年10月8日22時01分発行